同友会派遣 県内の大学生ら

岩手・大槌の海岸を清掃

津波被災住民と交流

岡山経済同友会が県内の大学生らを募って派遣した「東日本大震災復興支援ボランティア」の一行が23日、岩手県大槌町で海岸の清掃や被災住民との交流活動に臨んだ。派遣は今年が最後で、24日まで滞在する。

津波被害に遭った海岸で清掃活動する学生ボランティア＝岩手県大槌町吉里吉里地区

メンバーは県内12大学の39人と同友会会員ら12人。清掃活動は、津波被害に遭った同町吉里吉里地区の海岸を訪れ、流れ着いた木や廃家電などを約1時間半かけて拾い集めた。その後、同地区の祭りを見学したり、バスで町内を巡って復興の現状を学んだりした。

一行は22日に現地入り。同日夜には被災者3人から震災の様子も聞いた。同町で津波に遭った団体職員渡辺賢也さん(28)は、年配女性を背負って逃げる途中に腰まで水が押し寄せたが、墓石にしがみついて助かったと紹介。「被災地の話を家族や友人に伝え、日ごろから対策を怠らないでほしい」と訴えた。

川崎医療福祉大1年の中本千晴さん(18)は「震災の実態を多くの人に知ってもらえるよう、経験を資料にまとめたい」と話していた。

岩手県南部の大槌町は、津波などで死者・行方不明者が1200人を超えた。現在、がれきはほぼ取り除かれたものの、町人口の約3割に当たる3400人ほどが仮設住宅で生活している。

被災地への学生ボランティアは、国際医療ボランティア・AMDA（岡山市）の仲介で同友会が11年から毎年派遣してきた。今後は不定期での派遣も検討する。

（水野雅文）

2015年8月24日 山陽新聞朝刊 20ページ （C）山陽新聞社 無断複製・転載を禁じます。